

江戸時代の東京にあった二つの林業地

時代の波を受けて衰退した林業

■消滅した四谷林業

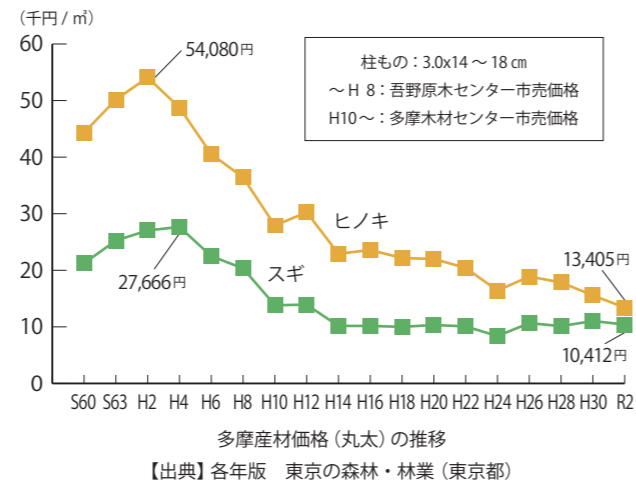
平地を林業に利用した四谷林業は、いつでも農耕地に転換することができた。都市近郊林業として市場で優位性を持つ反面、奥地の林業に比べて地代や労賃が高く、農産物価格の影響を強く受けたことは否めない。明治期まで、この地域では主に穀物(麦・粟・キビ・ヒエ・豆)が作られてきたが、明治20年代半ばを過ぎると、都市化により利益率の高い野菜生産が広がり、林業経営と競合するようになった。さらに明治25(1892)年頃から全国に猛威を振るったスギ赤枯れ病による被害や、木材価格の暴落、地価高騰などの影響で、造林を中止する農家が次第に増え、明治末期には森林面積が減少し始めた。それらの結果、大正末期頃を最後に四谷林業地での新造林は行われなくなり、ついには幻の林業となったのである。

■青梅林業の衰退

一方、青梅林業は幕府直轄領に自然に発展した民有林業として、明治以降も順調に推移した。1950年代には戦後復興に向けた木材需要に応えるため、全国各地で天然林の伐採跡地などにスギやヒノキが植栽された。多摩地域にもこの時期に多くのスギ、ヒノキが植えられ、高度成長期にかけて積極的な伐採と植林が行われた。

しかし1964年、統一された規格で大量供給ができる安価な外国産木材の輸入が本格的に始まると、輸入量が年々増加した。国産木材の価格は下落し、林業は縮小していった。

青梅林業地にもその波は押し寄せ、1960年に2,000人を超えていた都内の林業従事者は、2005年には数百人に激減した。木材の販売収入だけでは、人工林に間伐などの適切な手入れを施し、伐採や再造林を行うためのコストを賄うことが難しくなり、林業経営は長期的に厳しい状況が続いている。



コラム 豊かな森林を継承するために

東京の森林は、水源の涵養^{かんよう}、土砂災害の防止などの多面的機能を有し、都民にとってかけがえのない共有の財産である。また、スギやヒノキの人工林は、若い頃により多くの二酸化炭素を吸収するため、これらの循環利用(伐採・利用・植栽・保育の繰返し)を進めることは、地球温暖化の緩和に貢献する。

しかし、戦後に植林された人工林の多くは、林業の低迷により放置され、間伐などの手入れが不足し、これらの多面的機能の低下が懸念されている。東京の森林を次世代に健全な姿で引き継ぐためには、人工林の間伐を進めるとともに、既に十分に育った人工林を伐採し、木材として積極的に利用するなどの取り組みが重要である。



木のぬくもりが感じられる学校施設
荒川区立汐入東小学校(左) 台東区立平成小学校(右)

【参考文献】

- 「近世青梅林業の成立及び発展に関する歴史地理学的研究」松村 安一 東京学芸大学研究報告 16(9) 地理学 (1964年)
- 「四谷林業とその地理学的意義」松村 安一 歴史地理学紀要/歴史地理学会編 17 (1975年)
- 「杉Ⅰ ものと人間の文化史 149-Ⅰ」有岡 利幸 法政大学出版局 (2010年)
- 「杉Ⅱ ものと人間の文化史 149-Ⅱ」有岡 利幸 法政大学出版局 (2010年)
- 「平成25年版 森林・林業白書」

発行:東京都産業労働局農林水産部森林課 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号 電話 03-5000-7200

制作:シーアンドセットコミュニケーション株式会社 登録番号(05)200

この紙は、東京の木25%、古紙75%を配合した東京の木の紙です。



青梅林業(山岳林業)

多摩川上流域、同支流秋川流域に広がる里山では、中世から焼き畑が営まれ、奥山^{おくやま}の^{いりあい}入会(村落の共有地)や領主山には大径の天然林があった。

江戸時代には多摩地域西部の大部分が幕府領となり、管理が地元任せられ、豊かな森林資源が利用された。江戸の建設が始まると、江戸の材木商人が天然林の伐採・搬出を行い、山の近くの農民も薪や木炭を生産し始めた。入会地の一部や焼き畑地を利用して、スギ、ヒノキなどの針葉樹やコナラ、クヌギなどの広葉樹(薪炭林)の造林が盛んに行われた。

青梅地域が林業地として発展したのは、江戸という巨大消費地が出現したためである。これといった農作物もない急峻な山地で、植林は大きな収入源として農民に受け入れられた。

*奥山

人里離れた奥深い山。深山ともいう。これに対し、集落に接し、農民の生活とともにあるのが里山。

四谷林業(平地林業)

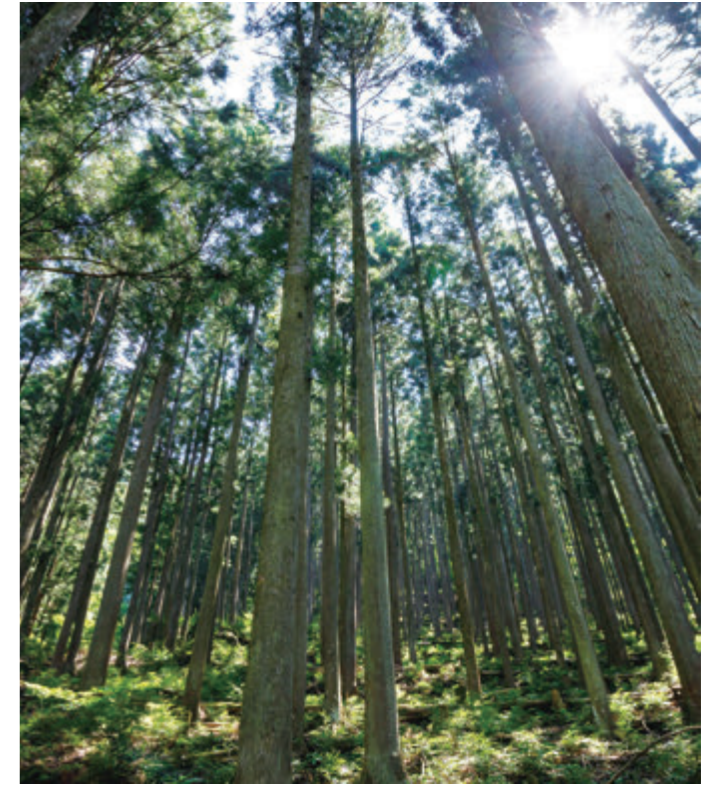
江戸初期に治山目的で行われ、やがて商業的にも広がった造林は、木の伐採や運搬にかかる労力を削減できることから、平野部や交通が便利な地域にも広がった。このことから、山岳林業の青梅林業に対して、四谷林業は平地林業と言われる。

四谷林業の成立時期は明確ではないが、俗説として、1697(元禄10)年、四谷塩町に薪炭問屋、四谷伝馬町に植木屋・材木屋があり、ここで扱われた木材を四谷丸太と呼ぶようになったとも言われる。文化から天保期(1804-1844)には、旺盛な需要から木材価格が高騰し、材木生産のための林業が全国各地で盛んになった。四谷林業地にも外部から商人資本が入り、借地林業^{*}も活発化して大きく成長した。

文政期(1818-1830)には既に「四谷林業」の名が定着。榎丸太、杉丸太を江戸へ供給する都市近郊の林業が成立していた。主に小径の丸太、薪、木炭を生産していた青梅林業に対し、四谷林業は大径の丸太を主力とした。

*借地林業

土地所有者から借地して行う造林経営。



それぞれに異なる青梅林業・四谷林業の成り立ちと強み

◆造林

青梅林業

寛文期(1661～1672)には、里山の大部分を占める焼き畑地で、農民による造林が盛んになり、木炭や木材生産が一層発展した。木炭は秋川流域の檜原炭を中心として大量に生産され、五日市が重要な市場となった。山深い生産地から、八王子や青梅にも炭が集められ、それぞれ五日市街道、甲州街道、青梅街道を経て、江戸へ運ばれた。

木材は杉の小丸太などを主要製品とし、植えてから30～40年で伐採する造林経営であった。木材生産と木炭生産の両方が発展したところに青梅林業の特徴がある。

四谷林業

元来、武蔵野は土質・気候などの点で必ずしもスギ生産の適地ではなかったが、それを補う独自技術を発展させた結果、関東を代表する杉の良質材を産出し、市場で高く評価されるまでになった。

四谷林業では種苗を自家生産した。土地を掘り返し地拵じごしらえした後、1町歩(約1ha)辺り6,000～8,800本を植栽。苗木の間は風雪対策を講じ、年数回の下刈りを5年ほど続け、腐葉土による施肥を行うなど、手間をかけた集約的生産

が行われた。

10～15年経つと枝打ちを行う。枝打ちをすると成長が抑制されるが、その後は幹の断面が正円となり年輪が密になって材質が良くなる。四谷丸太は真っすぐで光沢があり、切り口は正円に近く節は少なく、一本の立ち木から二～三本の柱材を取ることができた。上下で直径差はほとんどなく、柱材としては京都北山、奈良吉野の磨き丸太*と肩を並べたという。この磨き丸太を中心に垂木・建築用足場丸太なども生産された。

明治期の記録(東京市志料・1872)では、杉丸太は旧東京市に接する淀橋・渋谷・練馬・杉並・和田堀内で主に生産されたとあり、杉並区の地名はこれに由来するともいわれる。

「江戸四谷丸太とて四谷新宿より壱里ほど左右の在不毛乃平地によく生立、柱位なりたるを伐りて江戸へ出し、皮をはぎてみがけば吉野丸太の磨きて床の間の柱に用る位に紛ふ様なる木肌なり」(広益国産考・1844)

*磨き丸太

スギの樹皮をはいで、皮付きのまま磨き洗いた丸太材。銘木扱いの木材。

◆伐出・運搬

青梅林業

材木商人は、所有する山だけでなく、生産者から入札などで木材を購入し、杣そま(林業従事者)を雇って搬出した。多摩川上流の地形を生かし、伐出材をそのまま川に流す「管流し」により土場*まで運び、ここで筏を組んだ。豊富な水量を利用して、筏乗りが「筏流し」により河口の六郷・羽田まで下り、そこからは船に積み、長大材は船で筏を引いて木場へ送った。1650年頃には既に大規模な木材の流送を行っていた記録がある。

多摩地方からは年間4,000～6,000枚もの筏が出された。筏が護岸を破壊して周辺の村から通行禁止令が出されることもあり、多摩川、秋川沿いにいくつかの材木商の組合が結成された。

地域の農民(中小農)は、木の伐採や筏乗りも担い、林業労働を支えた。一方、大きな農家は材木商の役目も果たすなど、さまざまな人々がかかわることで、この地の林業は強化された。

青梅林業地では明治以降も植林活動が一層発展し、1894(明治27)年には、石灰や木材の運搬を目的に青梅鉄道が開通した。道路の整備も進んだため、河川による流送はやがて陸送に切り替えられていった。

*土場

森林で伐出した木を河原に一時集積し、筏を組む場所。

四谷林業

四谷林業地の周辺では、材木商がいくつかの組合を結成し、組織的に木材の伐出・流通を担っていた。材木商は

独力または木場商人の協力の下、柱材などの製品を木場や四谷の他、中野・今川橋(千代田区神田辺り)・花川戸(台東区東端)などにも出していた。銘木の柱材を傷つけないように、運送業者が荷車1台に5～6本を載せて木場まで運んだ。

◆江戸の消費地に近い強み

江戸は寛文期(1716～1736)には人口百万人の大都市になっていた。江戸に入荷する木材は、京都・大阪方面から送られてくる「下り荷」と、江戸近国からの「地廻り荷」に大別される。地廻り荷の利点は、筏流通が可能で海上運賃がほとんどかからないことで、青梅林業の場合、輸送費は木材価格の12～16%程度であった。一方で下り荷の輸送コストは当然高く、代表的な紀州材価格の半分は海上運賃であったとされる。

また地廻り荷は輸送期間が短く、集めた木材を筏に組む上流の土場から十数日で木場に到着できることも有利であった。特に出荷が多い2月・8月は、江戸市場では海が荒れて下り荷が入らない価格高騰期に当たり、市況に応じて出荷できる強みがあった。

さらに、江戸時代には各地で乱伐が起こって森林資源が枯渇したため、幕府や藩が森林の伐採を禁じる「留山」を定めたが、関東の幕府直轄領には、秩父・丹沢などに広大な備林*が広がっており、過伐による荒廃もなかった。青梅林業や四谷林業は、留山のような制限を受けることなく、江戸という大消費地の近くで民有業としてのびのびと成長することができた。

*備林

建設・工事用の木材の確保・育成を目的とした林。御林おほやし。



きんまみち
木馬道

奥地から木材を運び出すためにつくられたレール状の「木馬道」で(写真提供: 檜原村郷土資料館)



木馬道の木出し作業

そりそり籠(木馬)で木材を運び出す「木馬引き」は、危険をともなう作業であった(写真提供: 五日市郷土館)



木材を馬で

山道では馬車で木材を運んだ(写真提供: 檜原村郷土資料館)



御岳溪谷での筏流し(明治時代末期)

河川の豊富な水量を利用して、急流を筏で下る「筏流し」(写真提供: 青梅市郷土博物館)



炭の積み出し

昭和27年 金毘羅山付近(写真提供: 五日市郷土館)